

恩返し

2021. 7. 13

本校の卒業生2名が教育実習に来てくれたおかげで、多くの収穫があった。自分の教育実習時代のことも思い出すことができた。

小学校で実習を行ったのだが、中学校の教員免許も取るために、F中学校に授業を参観に行ったことがあった。その授業は、活発とはいえず、多少、沈滞ムードが漂っていた。これは、あくまでも私という学生が見た印象でしかない。もしかしたら、生徒がじっくりと思考していたのかもしれない。

何を思ったのか、学生の私は感じたことを、そのまま実習日誌に書いてしまった。そしたら、担当のM教授に呼ばれた。そして、諭された。要は、学生の立場で、授業を参観させていただいているのだから、こんなことを書くんじゃない。そういうことである。

授業を見せてくださった先生は、学生一人一人の実習日誌に赤でコメントを入れてくださっていた。私の日誌には、私の生意気な記述を受け止め、受容してくださったコメントがあった。内心は、はらわた煮え返る思いだったのかもしれない。何もわからない生意気な学生が、何を上から目線で言っているんだ。そう思ったかもしれない。いや、そう思われても仕方がないことをしてしまったのである。

その後も、M教授には大変お世話になった。いや、その後も迷惑をかけ続けた。大学を卒業できたのは、私の卒業論文に対して、M教授が温情あふれる成績をつけてくれたからである。M教授には、申し訳ない気持ちを抱いたまま大学を後にした。

教員となり、国語の授業にディベートを取り入れていたところ、テレビの取材が入り、ディベートの授業が放映された。すると、M教授からお電話をいただいた。ありがたすぎるお電話だった。あんな出来の悪い学生のことを覚えていてくださっただけでもありがたいのに、私の授業を見て連絡をくださったのである。少しだけ恩返しができるような気がした。

教員になっても、時折、生意気な部分が首をもたげることがあった。謙虚という言葉が知らなかったのかもしれない。そのせいで、多くのものを失ってきた。そのことは、自覚している。仕方がない。自分の人生の責任者は自分なのである。

教頭になる段階になり、ようやく謙虚の2文字をモットーに入れた。だが、時すでに遅く、一度ついた評価は、なかなか変わらないものである。

思い返すと、教育実習のときから、そうだったのかとなる。物事というものがわかっていない。世の中というものがわかっていない。一言で言ってしまえば、バカである。教頭になり、人間修行を始めてからは、謙虚・誠実・実行・寛容・感謝をモットーにして、生意気な自分を制御してきた。

自分にできることは、自分が経験した後悔を人に伝えることである。こんな私でも、捨てる神あれば拾う神ありで、節目節目で拾っていただいたおかげで、何とか続けられている。こう考えると、いったい何人の方に感謝しなければいけないのだろう。未だに何の恩返しもできていない。